様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １８ 日現在

機関番号：３４４１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００３９７

研究課題名（和文）文学テクストによる論理的想像力の涵養ー英語教育の転換を図るための基礎研究

研究課題名（英文）Logical Imagination Cultivated by Literary Texts

研究代表者
杉村　寛子（Sugimura, Hiroko）

大阪電気通信大学・共通教育機構・教授

研究者番号：２０４１１２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：グローバル社会を生き抜くために必要な思考力の涵養を目指す21世紀型英語教育への転換を目的とし、本研究では思考力のひとつとして「論理的想像力」という概念を学術的に定め、文学テクストを用いてそれを涵養する方法を探った。日本の国語教育（文学教育）まで文献研究の対象を広げ、想像力が内包する論理性を整理し、「論理的想像力」を定義することができた。さらに思考の過程が可視化される形でグループディスカッションや翻訳などを取り入れた授業を行ない、その結果を分析することによって「論理的想像力」をの性質を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究期間に、活発に口頭発表や学術論文の発表をすることで、思考力を涵養するという観点から、英語教育において再び文学テクストを活用していく意義を明らかにすることができた。またその方法論についても試行授業の結果を分析することで、文学テクストの活用の有り様について具体的に示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to define the concept of 'logical imagination' as a thinking ability which can be cultivated by reading literary texts. The empirical data gained from English classes, in which some short stories were used as reading materials, incorporating group discussions or translation activities were analyzed; as a result, it has clarified the nature of 'logical imagination' as imaginative power firmly based on logical reasoning and thinking.

研究分野：英文学

キーワード：文学テクスト　想像力　論理的思考力　翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

文学テクスト、思考力、英語教育という三つのファクターを巡る、本研究が開始に至った背景は以下の通りである。

（１）「想像力」の学術的位置づけ

想像力は‘the image-making faculty’であり、思考の過程で重要な働きをし（Hume 1738）、現前しない事柄・現象についての印象を生み出すことができるため、しばしば記憶と関連づけて論じられてきた（Berkeley, 1710）。しかし、記憶と想像力は、後者が受け取ったままの印象や考えの再生ではなく、それらを変容させるという点で異なる（Hume, 1738）。このようなことから、一般に想像力は恣意的で、創作などの芸術に特化した能力（Coleridge, 1817; Frye, 1964）としては評価されながらも、論理的な思考に関与するものとは見なされてこなかった。しかし、20 世紀に入り、想像力は過去と現在を調和させ、統合させるという、学びの力の一つとして考えられるようになり（Dewey, 1937; Greene, 1995）、さらに論理的な思考（特に‘critical thinking’）過程に想像力が関与していることが指摘されるようになりつつある（Fischer, 2011）。

（２）英語教育における文学テクストの再評価

初・中等英語教育において「オーラル・コミュニケーション」が重視されるようになり、以来教材として導入される英文が「比較的構造の単純なものに限定」され、「語彙も（構造の面でも、意味の面でも）単純なものが大部分を占める」ようになった（大津, 2008）。これを大学における英語教育という文脈に置き換えると、難解な語彙や複雑な構造の文は含まれるものの、文学テクストによく見られ、時に日常の言語活動においても見られるような両義性ないし多義性に富んだ表現が避けられた、明示的な言説が教材として好まれる傾向が強い。しかも、文学テクストは言語学習にほとんど資することはないと考えられ（MacKay, 1982）、日本においても英語教育の教材として文学テクストがその存在を失い始めてすでに久しい。しかし、文学テクストは比喩などの修辞表現を含み、読者に認知的負荷を掛ける。また文学テクストを読んでいるとき、読者は自ら抱いた印象の根拠をテクストのなかに求め、検討し、そのテクストからまた新たな印象が生まれ、検討するという円環をくり返し、最終的に解釈に至る（Spitzer, 1948; Leech & Short, 2007）ため、文学テクストを読むとき、複雑で高度な認知的操作が行われている。同時に、この認知的過程で知識や経験というテクスト外の情報を想像し、それが自らの理解・解釈に影響を及ぼす（Rosenblatt, 1995）。このような性質を備えた文学テクストが、現状では教育に資すると見なされていない。

２．研究の目的

思考力の涵養に資すると考えられる性質を明らかにし、それを活かす形で文学テクストを用いる方法論を探る。以上より、いわゆる「読む」「聞く」「話す」「書く」という 4 つの技能の向上に踏みとどまっている英語教育の現状を打破し、思考力を涵養すべき 5 番目の技能として積極的に設定する「21 世紀型英語教育」への転換を図る。

３．研究の方法

（１）文献研究

これまで取り組んできたクリティカルシンキングや想像力に関する文献研究を継続し、今度は論理的思考力と想像力の関係をさらに発展的に追究し、「論理的想像力」という概念を新しく学術的に確立していく。また実証的に「論理的想像力」を定義するために試行授業を行なうので、推論発問やグループディスカッションの方法論を探るための文献研究、ならびに（文学テクストを基盤とする）翻訳理論の文献を渉猟する。

（２）文学テクストの選定および翻訳を中心とする教材の作成

文学教育ではなく、英語教育において活用するに適した短編小説を精選し、それに基づくグループディスカッションおよび翻訳作業を授業において展開するために、教材を具体的に検討し、作成していく。

（３）試行授業の実施ならびに得られたデータの分析

研究代表者ならびに共同研究者の勤務校において、文学テクストを教材とした授業を実践し、得られた学生による産出物（データ）を主に質的に分析する。

（４）英国教育機関との学術交流

大学に入学する前からクリティカルシンキングをはじめとする思考力の涵養に重点を置くファウンデーションプログラム（大学入学準備教育機関）を開く英国の教育機関（Bangor University 日本研究所）の協力を得て、文学テクストを用いた授業の視察や、授業担当者と文学テクストを用いた思考力涵養に関して、学術的な交流を行なう。

４．研究成果

（１）「論理的想像力」の定義

文学テクストの読みには、ことば、すなわち「書かれたもの」に基づく論理的思考を働かせず

してはひとつの解釈には至れない側面がありつつ、また書かれたものから想像されうる「書かれていないもの」に基づく判断も含まれる。そして、読みの過程において、この想像された「書かれていないもの」が文学テクストの解釈に資する、適切なものかどうかの判断が絶えず読み手に迫られる。一般に文学テクストを読むことは想像力や『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説国語編』で謳われた「創造的に考える力」にのみ関係していると考えられているが、論理的にも、批判的にも、幾つかの層を成す視点から読み手は文学テクストについて思考していく。しかし、「論理的想像力」の作用はこれだけではない。文学テクストには再読を促す性質があり、その時点における読み手の（興味・関心、知識、経験などを総称する）「態度」によってテクストに入っていく入り口は変わり、その結果解釈にも変化が生じる。Rosenblatt の言うテクストと読み手との「有機的な相互作用」(transaction)は、その都度新しい読みを生み出す可能性を持ち、文学テクストに豊かな彩りを付加していく。そして、その有機的な関係において生じる読み手独自の気づきがこれまで照射されることのなかったテクストの側面を明るみに出し、読みの地平線を拡げる。このような文学テクストの新たな解釈を創出する力が「論理的想像力」の持つ最も重要な性質である。

（２）思考の過程を可視化する翻訳

外国語としての英語を読む時、聞く時、話す時、書く時、いずれの瞬間を捉えても、意識しているか否かはさて置き、誰しも母語を介して理解し、考えている。このように英語を学ぶ際に、無視できない母語を重要な要素として捉える翻訳は、英語で伝えられた情報を如何に理解したか、解釈したかを知る上で、鍵を握る。翻訳は「二人の作者（ソース言語で書く作者とそれをターゲット言語で表現し直す翻訳者）が共に機能する」過程である（Spivak, 2000 [1993]: 183）。また Umberto Eco は自ら書き上げたテクストが翻訳される過程を見、解釈者としての翻訳者の重要性を強調し、「二つの言語で解釈された二つのテクスト」と表している（Eco, 2001: 14）。このように「翻訳者は読者（(re)reader）であり、書き手（(re)writer）」であり、翻訳は「一読者によるテクストの解釈のしるし」であり、「場合によっては何段階にもわたる再読と書き換えを含む創作の過程を経て、最終的に産出されたもの」である。（Bassnett, 2014: 106）この再読と書き換えが思考そのものであり、したがって翻訳の分析によってその軌跡をたどることができる。

（３）文学テクストの選定およびグループディスカッション・翻訳を中心とする教材の作成

パイロットとして Erskine Caldwell や William Somerset Maugham、Isaac Asimov などによる短編小説を使った教材をいくつか作成した。この選定した短編小説はいずれも象徴や隠喩などを含み、理解や解釈をする上で読み手に認知的な負荷をかけてくるという意味で十分に読み応えのテクストである。しかし、用いられている英語のレベルが高すぎると、読解に支障をきたし、解釈するという段階に至ることが難しくなるため、試行授業を受ける学生の英語の習熟度によって、上記以外にも教材とするテクストをいくつか選定する必要があった。つまり日本の作家による短編小説を簡易な英語で書き直したものや、簡易な英語で書かれた物語を教材として用いる、あるいは本格的な文学テクストを用いるときは語義の説明を含め注釈を充実させる必要があった。文学テクストの選定において、読者としての学生を物語世界へと引き込む（イマージョン）ことができるかどうかも大きな基準となった。イマージョンの生じる度合いがグループディスカッションの活性化に比例すると考えられるからである。

グループディスカッションに用いる発問開発では、テクストからの根拠に基づき、推論を働かせることができるように工夫と改良を重ねた。翻訳に取り組ませる前に、翻訳といわゆる和訳との違いや、原文を構成する英語と翻訳語となる日本語の違いを説明する必要があった。そこで『翻訳読本』という簡単な演習問題を含めたガイドブックを作成した。このガイドブックによって翻訳の意味を十分に理解させた上で取り組ませることができ、学生の思考の過程を翻訳された文章から適切に抽出できるようになった。ガイドブックは適宜改良を加え、最終版については 2022 年 12 月に行なった口頭発表の場で公開した。

（４）試行授業によって得られたデータの分析

１．グループディスカッションにより得られたデータの分析

Hanauer (2001)によるグループディスカッションに関する分析カテゴリから 9 項目を選び、かつ独自に考案した 5 つのカテゴリを加えた 14 項目で、学生の間のやり取りを分析した。さらに個々の発言の時間を計測し、グループディスカッションの実態を解析したところ、積極的な解釈の共有はされていたが、ディスカッションによってそれ以上の解釈の広がりは観察されなかった。またこちらの用意した問い自体への理解が不十分であった場合もあれば、逆に活発な議論を導く問いが設定されていたことが確認された。次に、単にテクストを根拠とした解釈過程だけではなく、一般に文学テクストを読む際に読者のうちに生じている、テクスト外の情報（過去の経験、既に持っている知識など）を参照しているかどうか観察するために、学生にとって身近なテーマが展開されている短編小説を用いて試行授業を行なった。しかし、グループディスカッションを通して観察されたのは、期待されていたほど、学生はテクスト外の情報を参照していなかったということであった。これはグループディスカッションを円滑に促すために、事前に学生に模擬的にグループディスカッションの練習をさせるなどの必要があることを示唆する結果であった。

２．産出された翻訳の分析

英語教育から見た長所という意味で、英語で自分の考えなどを書く際に、しばしば日本人学生が陥りがちな二つ言語を一対一に対照させて、英文を生成しようとする態度に、翻訳による言

語の違いの意識化は一石を投じるものになるのではないかと考える。また、文学テクストの意味の生成者としての読者は、テクストを読み、頭の中でイメージしたものをことばで表現する際に、おのずとそのイメージとことばのつながりを客観的に見直すことになる。このように客観的な視座を持つ機会を与えられるというだけでも、少なくとも思考という観点から見て翻訳に教育的意義はある。ただし翻訳として産出された二次テクストのみで評価していいものかという疑問は残った。学生にコメントを書かせたが、翻訳の過程で頭を悩ませたことを書く学生は決して少なくはなかったため、その迷いが翻訳では拾いきれていないことも明らかとなった。

（５）英国教育機関（Bangor University 日本研究所）との学術交流

主に言語を基盤とする根拠を示した上で自らの考えや解釈を述べさせることを徹底した授業を参観させていただいた。また具体的にいくつかの詩を教材とした模擬授業に参加させていただき、詩を選ぶ基準や授業の展開方法について講習会も設けていただいた。小説などと比較して文字数の少ない傾向にある詩を教材にすることで、読み手は同じテクストを何度もたどる機会が得られること、それによって自らの読みと考えを深めることができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 杉村寛子	４．巻 12（61）
２．論文標題 文学テクストの翻訳に関わる問題の一端を探る　Wuthering Heightsの書き出しからの一節をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Media, English and Communication	６．最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tae Kudo and Hiroko Sugimura	４．巻 26
２．論文標題 Enhancing Students' Logical Imagination: An Online Lesson Using a Literary Work'	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Kwansei Gakuin University Humanities Reviews	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉村寛子	４．巻 52-2
２．論文標題 教養小説としてのAnne of Green Gablesーその想像力の行方	５．発行年 2022年
３．雑誌名 新英米文学研究	６．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南津佳広・中内啓太・杉村寛子	４．巻 10（通算59）
２．論文標題 思考の礎のひとつとしての推論力の構築ー絵本翻訳を通してー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Media, English and Communication: A Journal of the Japan Association for Media English Studies	６．最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tae Kudo and Hiroko Sugimura	4．巻 24
2．論文標題 Does Literature Stimulate Learners' Thinking Skills? A Comparison of Two Pilot Lessons	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関西学院大学言語教育研究センター言語と文化	6．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tae Kudo and Hiroko Sugimura	4．巻 Vol.9
2．論文標題 How Do Students Discuss a Literary Text on the Basis of their Interpretations? An Analysis of Students' Group Discussion	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Media, English and Communication: A Journal of the Japan Association for Media English Studies	6．最初と最後の頁 5-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉村寛子	4．巻 50-2
2．論文標題 ビルドゥングスロマンから逸脱するものーJane Eyreを手掛かりにAnne of Green Gablesを読み直す	5．発行年 2020年
3．雑誌名 新英米文学研究	6．最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南津佳広，杉村寛子，工藤多恵，金井啓子	4．巻 Vol.9
2．論文標題 シンポジウム報告「教育と翻訳通訳ーどのメディアをいかに教育に応用するかー」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Media, English and Communication: A Journal of the Japan Association for Media English Studies	6．最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南津佳広，杉村寛子，松田正貴，上垣公明	4．巻 21
2．論文標題 文学と通訳の公開教養講座開催の報告	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大阪電気通信大学人間科学研究	6．最初と最後の頁 131-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tae Kudo, Kym Jolley, Sei Sumi, Joshua Wilson, Laura Huston, Kent Jones	4．巻 Vol.10
2．論文標題 An Automated Reading Test Bank for Assessing Student Reading Ability	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Kwansei Gakuin Researches in Higher Education vol.10 pp.135-149	6．最初と最後の頁 135-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 杉村寛子、工藤多恵、南津佳広
2．発表標題 物語の翻訳に見る思考の過程いかにして「論理的想像力」を引き出すか あるいは 引き出せるか
3．学会等名 JACET文学教育研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 工藤多恵・杉村寛子
2．発表標題 文学テクストを用いた「論理的想像力」の涵養方法を探る ― アシモフの短編小説を教材とするオンライン授業の実践報告 ―
3．学会等名 JACET文学教育研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 南津佳広・杉村寛子
２．発表標題 字幕翻訳によるテクストの解釈とメタ言語能力の涵養について
３．学会等名 日本メディア英語学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 杉村寛子
２．発表標題 Scope for Imagination’- Anne of Green Gablesにおける『想像力』のゆくえ
３．学会等名 日本メディア英語学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 杉村寛子
２．発表標題 教養小説として『赤毛のアン』を読み直す
３．学会等名 大阪電気通信大学公開講座
４．発表年 2021年

１．発表者名 南津佳広
２．発表標題 サイトトランスレーションにおける語用論的処理に関する一考察
３．学会等名 第48回九州英語教育学会宮崎研究大会（於：宮崎公立大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 南津佳広・中内啓太・杉村寛子
２．発表標題 思考の礎のひとつとしての推論力の構築 －翻訳を通したメディアとしての文学テクスト活用の可能性を探る－
３．学会等名 第９回日本メディア英語学会年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tae Kudo, Sei Sumi, and Kym Jolley
２．発表標題 Unified Vocavulary and Reading Comprehension Assessments with the Automated Test Maker
３．学会等名 The 2nd JACET Summer Seminar (46th) and English Education (7th) Joint Seminar
４．発表年 2019年

１．発表者名 南津佳広・杉村寛子
２．発表標題 TILTによる訳出をめぐる語用論的プロセス分析と論理的思考力の涵養
３．学会等名 九州英語教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 杉村寛子
２．発表標題 シンポジウム「教育と翻通訳ーどのメディアをいかに教育に応用するか」思考の軌跡をたどるー文学テクストの翻訳の可能性
３．学会等名 日本メディア英語学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 杉村寛子
２．発表標題 似て非なるもの－『嵐が丘』と水村美苗の『本格小説』
３．学会等名 大阪電気通信大学公開教養講座
４．発表年 2019年

１．発表者名 工藤多恵
２．発表標題 シンポジウム「教育と翻通訳ーどのメディアをいかに教育に応用するか」理系学生 X 翻訳　読みを深めるための取り組み
３．学会等名 日本メディア英語学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 南津佳広
２．発表標題 シンポジウム「教育と翻通訳ーどのメディアをいかに教育に応用するか」逐次通訳訓練手法はモノローグ・スピーチ産出の訓練にどこまで貢献しうるか
３．学会等名 日本メディア英語学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 南津佳広
２．発表標題 書き直しとしての『再表現』－映像翻訳を通して
３．学会等名 大阪電気通信大学公開講座
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshihiro MInamitsu
２．発表標題 Promoting Fluent Language Production through the Method of Consecutive Interpreting
３．学会等名 The 26th Korea TESOL International Conference 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	工藤　多恵 (Kudo Tae) (70342350)	関西学院大学・工学部・教授 (34504)	
研究分担者	南津　佳広 (Minamitsu Yoshihiro) (70616292)	大阪電気通信大学・共通教育機構・准教授 (34412)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関